

国語〔前期A方式(1/29)〕

設問		解答例	
一	問一	①	1
		②	5
		③	1
		④	3
		⑤	4
	問二	⑥	5
		⑦	2
		⑧	6
		⑨	4
		⑩	1
	問三	⑪	2
		⑫	4
		⑬	3
		⑭	1
		⑮	5
	問四	⑯	2
		⑰	5
		⑱	3
		⑲	4
	問五	⑳	2
	問六	㉑	2
	問七	㉒	3
		㉓	1
	問八	㉔	5
	問九	㉕	5
二	問一	㉖	3
		㉗	4
		㉘	1
		㉙	5
		㉚	5
		㉛	1
	問二	㉜	3
	問三	㉝	2
	問四	㉞	2
		㉟	4
		㊱	5
	問五	㊲	3
	問六	㊳	4
		㊴	2
		㊵	1
		㊶	2
	問七	㊷	5
	問八	㊸	4
	問九	㊹	4

国語〔前期A方式(1/30)〕

設問		解答例	
一	問一	①	3
		②	2
		③	4
		④	1
		⑤	5
	問二	⑥	1
		⑦	4
		⑧	5
	問三	⑨	4
		⑩	5
		⑪	2
		⑫	3
		⑬	1
	問四	⑭	1
		⑮	2
		⑯	7
		⑰	4
		⑱	6
	問五	㉐	5
		㉑	3
	問六	㉒	4
	問七	㉓	4
	問八	㉔	4
二	問一	㉕	2
		㉖	3
		㉗	2
		㉘	4
	問二	㉙	2
		㉚	4
	問三	㉛	4
	問四	㉜	1
	問五	㉝	5
	問六	㉞	3
三	問一	㉟	4
		㊱	2
		㊲	3
	問二	㊳	4
		㊴	1
	問三	㊵	5
	問四	㊶	3
	問五	㊷	4
	問六	㊸	2
	問七	㊹	4

国語〔前期B方式〕

設問		解答例	
I	問一	①	4
		②	4
		③	5
		④	1
		⑤	3
	問二	⑥	3
		⑦	5
	問三	⑧	4
		⑨	5
		⑩	3
		⑪	1
		⑫	2
	問四	⑬	6
		⑭	3
		⑮	2
		⑯	4
		⑰	1
	問五	⑱	4
		⑲	2
	問六	㉐	3
	問七	㉑	3
	問八	㉒	2
	問九	㉓	3
II	問一	①	5
		②	2
		③	3
		④	5
		⑤	4
		⑥	1
	問二	⑦	4
		⑧	3
		⑨	1
		⑩	2
		⑪	7
		⑫	6
	問三	⑬	1
		⑭	3
		⑮	5
		⑯	2
		⑰	2
	問四	⑱	5
		⑲	3
	問五	㉐	2
	問六	㉑	5
	問七	㉒	3
	問八	㉓	4

国語〔前期B方式〕

設問		解答例	
III	問一	①	6
		②	2
		③	6
		④	2
		⑤	5
		⑥	4
	問二	⑦	5
		⑧	1
	問三	⑨	2
	問四	⑩	4
	問五	⑪	1
	問六	⑫	2
	問七	⑬	3
	問八	⑭	2
		⑮	4
		⑯	2

国語〔後期〕

設問		解答例	
一	問一	①	4
		②	2
		③	4
		④	3
		⑤	5
	問二	⑥	1
		⑦	2
		⑧	1
		⑨	5
		⑩	2
	問三	⑪	2
	問四	⑫	4
	問五	⑬	4
	問六	⑭	1
	問七	⑮	3
	問八	⑯	4
	問九	⑰	5
	問十	⑱	5
二	問一	㉐	5
	問二	㉑	3
	問三	㉒	4
	問四	㉓	5
		㉔	1
	問五	㉕	3
	問六	㉖	1
	問七	㉗	1
	問八	㉘	4
	問九	㉙	2

国語〔前期A方式 1／29〕

□

問六 傍線部の理由を問う問題。第五段落で「アウグステイヌスにとって『寛容』とは『悪人たちを見逃す』という意味であった」とあり、「寛容」でない「教会の平和を乱すことになる。だから寛容にすべきだ」という考えだったことが説明されている。この考えは「イエス」が語っていることを前提としており、「キリスト教の教義を前提」としている。この内容と、第六段落の「全体的な差し引き勘定」や第七段落の「全体のバランスを勘定に入れた結果」という表現をふまえると、「寛容」になるべきか否かの判断は、「教会ひいては社会の安定を保つために運用されるべき」とアウグステイヌスが考えていたことがわかる。よって、これらの内容を述べた選択肢②が正解。①は「アウグステイヌスの寛容によれば、たとえイエスの言う『毒麦』であっても摘むことはできない」が、第六段落の「罰する方がプラスだ、と判断できれば罰する」と合わないで誤り。③は「個人の判断によってできることではなく」「教会が……決定したうえで……用いるべき概念」が誤り。④は、「更生や処罰といった力の行使と結びつく」が誤り。⑤は「個人の能力の問題ではなく、社会を治める権力をもつ者がその行使を慎みつなすべき課題」が、本文にそのような記述はないので誤り。

問八 傍線部の理由を問う問題。パラドックスとは「一見真理に反しているように見えるが、その実ある種の真理を言いあてている表現」という意味なので、選択肢②か⑤のいずれかが正解だと推測できる。また、傍線部の前の「ここ」が指し示すのは「『愛せよ』という命令ではなく、『憎むな』という命令であり、その憎しみを外的な行為に表現するな、という命令」という部分である。これは、「対象への否定的感情を前提」として「それを受け容れるという態度」ということなので、選択肢⑤が正解。①・④は、「見た目は肯定的形式を取りながら、逆に否定的結論を導く表現」が誤り。③・⑥は、「相反するふたつの事象が、高度な次元でその矛盾を解消して統一をはかるような表現」が誤り。

問九 傍線部の理由を問う問題。①は「邪悪を……是認すること」が、②は「とりあえず『見逃す』ことを認めたような」が、③は「好き」になり「愛する」ことに利があると考えられる場合には、是認はしないまでも容認するような、実利的な」が誤り。④は、「異教徒」や「高利貸し」「売春」を寛容の対象とすることを目的として」という部分が、目的として不適当なため誤り。第六段落で、「罰しないのは、悪でない」と判断されたからではなく、罰すると大きな弊害をもたらすからである」と述べられているとおり、より「大きな弊害」を防ぐことが目的である。⑤は、第六段落で、「悪はあくまで悪であり、罰せられるべきなのである。全体的な差し引き勘定からして、罰する方がプラスだ、と判断できれば罰する。罰しない場合でも、それは悪であり続ける」と述べられていることと合致する。よって、選択肢⑤が正解。

問三 傍線部の理由を問う問題。傍線部の後で、「御琴をば教えたてまつりたまひしが、琵琶はさも承らず」とあるので、「御琴」や「琵琶」などの管弦にかかわる方面が話題となっている。よって、選択肢②が正解。

問六 傍線部の理由を問う問題。ア「雲居」は「雲がかかった遠い所」「宮中」「天上界」という意味で、「目見入れ」は「心を停めて見入る」「物の怪などが取り憑く」という意味である。妹姫君の琵琶の演奏について、傍線部の後で「宰相の中将」が、「そら恐ろしきまでありがたく（そら恐ろしいほどに優れていて）」と感じていることが述べられているので、選択肢④が正解。

エ「宿世」は「前世」「運命」という意味で、「あたらしき」は「惜しい」という意味の形容詞「あたらし」の連体形。傍線部の前の「言ひ知らずつくしかりし人（何とも言えない美しい人＝天人）」が、

妹姫君の運命を惜しんだことが推測できる。よって、選択肢②が正解。オ 傍線部は反語になっており、「どうしてお弾きにならないことがあるでしょうか、必ず演奏なさるであろう」という意味である。よって、選択肢①が正解。カ 傍線部の前に「御夢の教へ、げにひがごとくもやと（あなたが夢で受けた教へは、なんとまあ道理に合わないことかと）」とある。この内容を、琵琶の名手である「式部卿の宮の中将」に「聞かせ参らせばや（聞かせてさしあげたい）」という文脈なので、選択肢②が正解。

問七 傍線部の理由を問う問題。傍線部の「この御ありさま」は妹姫君が琵琶をすばらしく演奏する様子をさしている。この様子があまりにすばらしいので、「後の位になしたてまつりても（妹姫君を帝の後の位につかせなさつても）」「足らず（不十分だ）」だと宰相の中将は考えている。よって、選択肢⑤が正解。

問八 傍線部の理由を問う問題。傍線部は「このように思い悩むことがいつもあるのは、なぜだろうか、（天人が琵琶の楽曲を）伝えるべきとはいえない。（伝授に値するのは）妹姫君だけだと思ふ」と言つて、二年もいらつしやつて残さず伝えたからであろうか」という意味であり、宰相の中将は、天人から琵琶を教わったことが、妹姫君の悩みの原因ではないかと自問自答している。よって、選択肢④が正解。①は「思いわずらうことがいづれ終るのであれば」が、②は「楽曲の伝授に値するのは君だけだ」という天人の賞賛は、的外れなものではないか」が、③は「楽曲の伝授者であることに価値は無いのではないか」が、⑤は「妹姫君が二年間広沢に滞在して、楽曲を人々に伝授すれば覆せるのではないか」が誤り。

問九 文学史の知識を問う問題。「夜寝覚物語」は平安時代後期成立の作り物語。ただし、本文は鎌倉時代後期頃成立の改作本である。①「うつは物語」は九八四年頃に成立した作り物語である。②「おちくは物語」は、九九〇年頃に成立した作り物語である。③「狭衣物語」は、一〇六九～一〇七七年頃に成立した作り物語である。④「たまきはる」は、一二一九年に成立した日記文学である。⑤「とりかへばや」は一一六八～一一八〇年頃に成立した作り物語である。ジャンルの異なる作品を選ぶので、選択肢④が正解。

国語〔前期A方式 1／30〕

□

問五 空所補充問題。選択肢はいずれも「まさに」で始まっており、直前の内容の言い換えになっていることがわかる。空所Xの直前で「裁判員裁判において、市民が死刑制度についてどう考え、個々の死刑判断をどう考えるかは、文字通り裁判官と同じウェイトと力を持つ」と述べられている。すなわち、裁判員制度の下で、市民は死刑問題に関して裁判官と同等の影響をもつということなので、選択肢③が正解。①・②・④・⑤はいずれも文脈に合わないため誤り。

問六 傍線部の理由を問う問題。傍線部の「本章」は同じ段落で「権力側の意図」、また第四段落で「権力側の目論見」と言い換えられている。第四段落で、「権力側の目論見にはまること」とは、「市民」が「当局」の「啓蒙」を受けて「権力」に「迎合」してしまうことであり、それによって「市民の意欲が無力化される」とことと述べられている。以上に合致する選択肢④が正解。①は「刑事裁判に関心を持つように」が、②は「刑事裁判を権力化するよう啓蒙する」が、③は「市民の側の抵抗と闘争を必然化する」が、⑤は「司法の民主化を実現する」が誤り。

問七 傍線部の理由を問う問題。傍線部の「不都合な前提」は次の段落で、「権力論につながる大前提」と言い換えられている。それは、「司法の民主化を実現する」ためには、「市民は職業裁判官と同じ立場

には立てない」という前提である。よって、この内容に合致する選択肢④が正解。①、②、③、⑤はいずれも「前提」の内容を正しく説明していないので誤り。

問八 筆者の主張を問う問題。第十段落で、筆者は、「市民は、権力の一部として裁く前に、権力と闘う必要がある」「被告人を裁くことだけに汲々としていたのでは意味がない」と述べている。また、第十四段落以降で「裁判員制度」が市民の側に「権力内権力テンプク手段」を認めており、「市民は、その気になりさえすれば、内部から司法の在り方を変えていくことができる」「裁判員時代の市民は、既存の『法』権力」が用意している道を利用して革命的状況へと進める」「死刑権力の発動（あるいは不発動）に対して、市民は、そうしようと思えば、はつきりと批判し、抵抗し、反対することができる」と述べている。つまり、筆者は、市民が裁判員裁判を通じて権力に抗い、司法を内側から改革していくべきであると主張していることが読み取れる。よって、選択肢④が正解。①は「外在的限界を打ち破る必要がある」が本文に書かれていないので誤り。②は「市民は……裁判官と同じ権限を持たなければならぬ」と誤り。「裁判員裁判」における市民の判断は、制度上「文字通り裁判官と同じウェイトと力を持つ」のであり、「持たなければならぬ」と主張してはいない。③は「市民感覚によって」が誤り。「市民感覚」ではなく「司法権力内権限行使」によって司法を改革していくべきだと述べられている。⑤は「裁判員制度による判断が適切である」が本文に書かれていないので誤り。

Ⅲ

問七 傍線部の内容を問う問題。傍線部の「それ」とは、直前の「人の気色とらぬ先に、月見むとて、母の方に来て、わが琴弾かむ」を指している。これは「来たる親族」が「たばかりける（＝企んだ）」ことであり、直訳すると、「人が気付かないうちに、月を見ようと言って、母の方に来て、私が琴を弾こう」となる。これにまぎれて、娘が、男と「簾のうちに、ものいひける（簾の内側で、話をした）」のであるから、「来たる親族」の策略は、母親をはじめとした家の人間たちの気をそらし、娘と男の逢瀬の時間をかせぐことが目的であったと読み取れる。よって、選択肢④が正解。①は「男が……琴を弾くふりをして娘に近づく」が、②は全体が、③は「娘が……琴を弾いて機嫌を取る」が、⑤は「男が……琴を弾いて気に入られようとする」が誤り。

問八 和歌の解釈を問う問題。Iの和歌を直訳すると、「たまには聞けと奏でた琴の音のように、合わせても合わない声があることだ」となる。この和歌は男が娘に対して詠んだもので、男が娘と簾の内側で親しく話をしていた途中で、娘の母親が起きてしまい、帰らざるを得なくなってしまう場面でも詠まれていることから、「あひてもあはぬ」は「琴の音が合っても合わない」と同時に、「男が娘に会えても結ばれない」とも意味していると考えられる。よって、選択肢①が正解。②は「日常生活で琴の音を聞く機会がめつたにない」が、③は「私の声を心して聴けと呼びかけている」が、④は「見事に調和した琴の音色とは違って」が、⑤は「あなたが母親に気を取られたからだと憤っている」が誤り。

問九 傍線部の内容を問う問題。「親さあはすとも」とは、傍線部の前の、「こと人にあはせ」ること、すなわち、親が娘を他の男と結婚させることを指している。また、「さやはあるべき」は、反語の係助詞「やは」があることから、「そのようであるべきだろうか、いや、そんなことはない」という意味になる。つまり、傍線部の趣旨は、「親が他の男と結婚させるとしても、親の意向通りにしなくてもよいのではないか」ということである。よって、選択肢③が正解。①は「相手を気に入るとは限らない」が、②は「親が娘の機嫌をとろうとしたとしても」が、④は「自分のことを忘れることはないのではないか」が、⑤は「親が娘に厳しく接したとしても」が誤り。

問十 文学史の知識を問う問題。甲『平中物語』は『貞文日記』とも呼ばれ、平貞文が主人公とされている。よって、選択肢③が正解。乙『平中物語』が成立したのは平安中期とされており、この時期に成

立した他の歌物語としては、『伊勢物語』や『天和物語』が挙げられる。よって、選択肢⑤が正解。

国語(前期B方式)

Ⅰ

問六 傍線部の内容を読み取る問題。傍線部の前の第四段落で、アルス社が北原白秋にゆかりのある出版社であることが説明されている。そして、同段落に「芥川にとって北原白秋は敬愛する作家の一人でした」「芥川はどれほど多忙であつても、アルス社（阿蘭陀書房）の執筆依頼だけは断らないようにしていた」と述べられている。さらに、傍線部の段落では「芥川は親友である菊池寛と白秋およびアルス社との間で板挟みになって」いったことが説明されている。具体的には、「アルス社から『日本児童文庫』の一冊、『支那童話集』の担当を引き受け」たのに、同じような児童向けの『小学生全集』の構想を親友の菊池から聞かされ「ていたということである。また、『アルス社の依頼を持ってきた友人の佐藤春夫』に、『小学生全集』の編集責任は名前を貸しているだけ」という言い訳を伝えてくれるようにと言付けているので、白秋とアルス社を軽んじていないことを言い含めてほしいという意図だとわかり、選択肢③が正解。

問七 傍線部の内容を読み取る問題。第七段落にある北原白秋によるマザー・グースの訳では、タルトが「お饅頭」と訳されている。そして、傍線部の後に、「やはりなんと言っても『タルト』が『お饅頭』になっている点は見逃せません」という説明があるので、選択肢③が正解。①・②・④は「芥川と白秋の関係」にまつわるエピソードではあるが、傍線部が指し示しているエピソードではないので誤り。⑤の「まがい海亀」のエピソードは、第十一段落で、筆者が「世の中の悩みの多くに当てはまりそうな、心に沁みる台詞」と考えた部分であり、「芥川と白秋の関係に思いを馳せたくなるエピソード」としては不適当なため、誤り。

問八 傍線部について筆者の考えを読み取る問題。傍線部の前の「状況から考えると、芥川・菊池の訳には、下訳を行った名もなき翻訳者がいた可能性が高い」「その方たちなくして」という部分から、『アリス物語』の成立に「名もなき翻訳者」が重要な役割を果たしたと筆者が考えていることが推測できる。よって、選択肢②が正解。①は「両者の互いに対する信頼」が、③は「出版元文藝春秋社の総力の結集なくして」が、④は「菊池の敬意」や「親友への義理と白秋への敬愛の念との間で引き裂かれていた芥川」が、⑤は「芥川と菊池、両者の力以上に」「出版に携わったすべての人々の努力」が誤り。

Ⅱ

問五 脱文補充問題。脱文は、「ペーコン」が「このような発想」とは異なる、「人間が自然に対して積極的に働きかけ、その結果を検証することによって、初めて解明される」という考えをもっていたことが説明されている。したがって、直前で異なる内容が述べられている①か②が解答の候補となるが、①は、直後の「つまり」以下の内容と合わない。よって、選択肢②が正解。

問六 空所補充問題。空所Xは、その直後に「こうした自然観の変化」とあるので、「自然観の変化」を説明したものである。また、空所Xの前に、「自然を人間よりも優れたものとして模倣する態度は、自然を自らの関心に従って操作し、管理しようとする態度へと、転換する」とある。よって、選択肢⑤が正解。①は「観察されるだけの対象」が誤り。②は「人間と自然との距離感をはかり難いものとしてしまった」が誤り。③は文脈と合わないので誤り。④は「利用する価値のある存在ではなくなくなってしまった」が誤り。

問七 点線部の前提となる考えを読み取る問題。点線部の前に「アリストテレス」は「観想」を「技術を

発展させる手段」としては見ず、「観想はそれ自体で価値のある行為」であり「それを技術に活かせるかどうかは、観想そのものの価値と何ら関係がない」と考えていたことが説明されている。点線部は、このような考えに「ペーコン」が「与しない」という内容なので、選択肢③が正解。

問八 本文全体の内容を問う問題。①は、第三段落の「技術をうまく行使するために、私たちは……（自然の）本質を理解しなければならぬ」とや、第四段落の「こうした技術観もまた人類の歴史の非常に長い期間を支配していた」、さらに第五段落の「一五世紀の発明家であるレオナルド・ダ・ヴィンチ」の構想の中に「自然の模倣」がみられたという本文に合致する。②の「鳥の羽の構造の観察から空飛ぶ機械の作製の実現を目指す」という発想の根幹にある思想」は、第四段落の「自然が人間を凌駕する存在であり、人間よりも優れていると考える自然観」である。この自然観は、第六段落にあるように「近代の始まりとともに覆され」るが、第十段落にある「人間が自然を解明できるのは、自然を技術によって再現」できるという考えとは相容れないものである。③は、第二段落で「古代ギリシャの哲学者アリストテレスは、技術を、ある目的を達成するための手段を製作する営みとして定義した」に合致する。また、第四段落で「技術観」の前提が「自然観」であることが説明され、第九～十一段落でこうした自然観の変化があったことが述べられている本文とも合致する。④は、第二段落のアリストテレスによる技術の定義に合致しない。⑤は、最後の段落の「二〇世紀に明らかになったことは、技術がむしろ人類に対して未曾有の破局をもたらすということだった」という本文に合致する。合致しないものを選ぶので、選択肢④が正解。

Ⅲ

問三 和歌の意味を問う問題。Aの和歌の「麓の道」は「稽古の方法」、「同じ雲居の月」は「最終的な（芸の）到達点」という意味であり、「能力や才能に応じて稽古の方法は数多くあるが、最終的な到達点は同じである」という意味になる。よって、選択肢②が正解。

問四 傍線部の内容を問う問題。傍線部の前に「とかくとかく生まれつきたる相応、時分を考へ、教ふべし」とあり、「相応」は「自分の資質」、「時分」は「年ごろ」という意味なので、選択肢④が正解。

問五 傍線部の内容を問う問題。傍線部の後で「昔は執心する弟子多くあれども師教へず。今の世は師あれども執心する者なし（昔は熱心になる弟子が多かったが師は教えなかった。今の世の中では、（教えてくれる）師がいても、熱心になる者がいない）」と言い換えられていることから、傍線部の内容が推測できる。よって、選択肢①が正解。

問六 傍線部の理由を問う問題。傍線部の後で「声のかはりに顔かたちも違ひぬれば業もかはるべし（声がわりがあり、容貌の変化があれば、身につけるべき技も変わってくるのが当然だ）」と述べられている。よって、選択肢②が正解。

問八 文学史の知識と本文の内容を問う問題。14『風姿花伝』は一五世紀に世阿弥によって成立した能楽論書なので、選択肢②が正解。15本文の点線部の後に「あまり糺明すれば芸すくむ。さは言へど油断すべからず。稽古に精を入れ、煩ふとも許すべからず（あまりに悪いところを指摘しても、芸が委縮してしまふ。そうは言っても油断してはいけない。稽古に精を入れさせ、うまく行かなくても許してはいけない）」とある。よって、選択肢④が正解。16空所の前に、「初心」は必ずしも「始めた頃」のみに当てはまるものではなく、それぞれの修業段階において存在するものとす」とあるので、選択肢②が正解。

国語〔後期〕

問四 空欄補充問題。空欄を含む文の冒頭に「自分の母親の自慢話をするようで気がひけるけれども」という前置きがあるので、空欄の直前の「心からの感謝」を肯定するような語が適当である。適当ではないものを選ぶので、選択肢④が正解。

問五 傍線部の内容を問う問題。傍線部の後に、「私は今でも自分の言葉で言いたいことのニュアンスを表現できないような時、とっさに漱石の作品中に書かれている言葉、例えば『吾輩は猫である』の苦沙弥先生の台詞などを口にしてしまうことがある」とある。よって、選択肢④が正解。

問六 傍線部の内容を問う問題。『夢十夜』の「そのくだり」の冒頭で、若い男が、仁王を造るのは「木の中に埋まっているのを、鑿と槌の力で掘り出す」だけでできると述べている。また、傍線部の直前で「明治の木には到底仁王は埋っていないのだと悟った」とある。よって、選択肢①が正解。②は「運慶というすぐれた技術者がいないために」が、③は「もはや運慶のように根気のある彫刻家はいないことがわかった」が、④「木の中に仁王像がないことを教えられ」が、⑤は「仁王像が埋まっているか否かは時の運」が、それぞれ誤り。

問七 傍線部の内容を問う問題。傍線部の後の「運慶が仁王を彫る手つきは」で始まる段落で、運慶の「無造作であり、荒削りであり、無遠慮」に見える「自然な、無理のない創造」が、「自然科学における創造の理想的な姿」だと筆者が思っていることが述べられている。よって、選択肢③が正解。①は「点検を行いつつ彫り出される」が運慶の彫り方に合わない。②は「認識の出発点であるモデルの組み立て」と「理論の射程」の関わりは、運慶と仁王像の話から筆者が考えたことと合わない。④は「科学者も卓越した直観力を持たなければならない」が、⑤は「超自然的な能力に頼るのではなく」が、それぞれ誤り。

問八 傍線部について筆者の考えを問う問題。傍線部の前に「水のあるがままを自然科学にとらえることが不可能」とある。また、傍線部の後で、「それゆえ水そのものを直接組上にのせるのではなく、水の模写（モデル）が……組み立てられる」「これを模写主義、あるいはモデル主義と呼ぶが、自然科学者は多くの場合、まず、この方法によって自然認識を始める」と述べられている。よって、選択肢④が正解。①は「自然科学の範疇とは異なる領域にある」が、②は「自然科学的認識は実験を通じて行わざるを得ない」が、③は全体が、⑤は「技術的な理由から」「科学のさらなる発達を待つて初めて可能になる」が、それぞれ誤り。

問九 傍線部の理由を問う問題。「してみると」で始まる段落で「自然科学者は自分が設定したモデルを凝視し……常に点検をくり返さなければならない」とある。また、傍線部の前の段落で、「他の自然科学者が発表した理論」や「化学反応に関する私の理論」を吟味するときに、漱石作品から得た感覚に頼っていたことが述べられている。そして、傍線部の直前で「歴史を学び、文学に親しんだこと」が「私の学問に対する姿勢に関与している」という経験から「学ぶことに無駄なものは何も含まれていない」と筆者が実感したことが説明されている。よって、選択肢⑤が正解。

問一 傍線部の理由を問う問題。其角の「まことの雪の門なり（本当に雪の門をよく表現している）」という批評について、芭蕉の教授を長年受けた自分が「いかで雪の門の発句に雪の門ならぬ句をいたし候はんや（どうして雪の門の俳句を詠むのに雪の門の本質を表現できていない句を詠むでしょうか？詠むに決まっています）」と述べている。つまり、其角の評価が的外れであることを「誠に情なき（大変情けない）」と去来は思ったのである。よって、選択肢⑤が正解。

問四 傍線部の意味と解釈を問う問題。(i)「かは」は反語の係助詞なので、傍線部の「いかに久しきものとかは知る」は「どれほど長いものであったか知っていますか? いいえ、知らないでしょう」という意味になる。よって、選択肢⑤が正解。

(ii)「はじめ」の句は、Bが「あくる間知れや(夜があけるまでの時間の長さを知れ)」、Cが「あくる間を(夜があけるまでの長い時間を)」という部分が、「あけるまでの時間」の長さを詠んでいるという点で、藤原道綱の母の和歌と共通している。よって、選択肢①が正解。

問五 傍線部の意味を問う問題。傍線部は、Bの歌を直した理由が述べられている部分であり、傍線部の直後に「発句の手柄すくなく、殊には『知れや』と理屈・分別にいたり候ふことを、いかがに存じ(俳句に苦心がすくなく、特に『知れ』という部分が理屈っぽく分別臭くなっていますことを、いかがなものかと思ひ)」とある。つまり、「あくる間」の長さや、「知る」という語を詠んだことによつて、藤原道綱の母の句が想起させる世界から抜け出していないことに、去来は不満を感じたのだとわかる。よつて、③が正解。

問六 二重傍線部の意味を問う問題。「なほ」には「さらに」「ますます」「やはり」といった意味があるので、文脈から意味を推定する。去来はAの句を生むために、「道綱の母」の「歌の魂に落ち」ないように修正を行ったうえで、さらに「心々と」の句を思いついている。よつて、選択肢①が正解。

問八 傍線部の意味を問う問題。「さび」とは閑寂や枯淡の境地という意味で、俳諧で重視された理念である。よつて、選択肢④が正解。①・③は句についての否定的な内容になっている点で、傍線部の後に「これを自賛つかまつり候ふ(これを自分でほめております)」とあることと合わず、誤り。②は「古めかしい雰囲気」が、⑤は全体が誤り。

問九 空欄補充問題。直前に「これとても、雪の門はのがす」とある。句を修正する過程を経た、B・Cいずれの句にも「雪の門」は残っていることから、「のがす(失くす)」ことはしなかったとわかるので、否定的な意味の②「まじく」か⑤「がたく」のいずれかが入るとわかる。「がたく」につながる場合は、連用形「のがし」となる。よつて、終止形の「のがす」につながる語としては、「まじく」の方が適当なため、選択肢②が正解。